

暖簾のれん

山崎豊子



新潮文庫

の
暖

新潮文庫



昭和三十五年七月十五日 発行
平成元年十二月二十日 三十六刷改版
平成三年十二月二十五日 三十七刷

著者 山崎 豊子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)三二六六―五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

© Toyoko Yamasaki 1957 Printed in Japan

ISBN4-10-110401-8 C0193

庫

暖

簾

山崎豐子著



新潮社版

1403

暖

簾

第一部

曠

一
たった三十五錢をにぎりしめて、八田吾平は大阪へ出た。明治二十九年の三月はじめが、その日だった。日清戦争直後の好景気のさなか、故郷の淡路島では、大阪の街に金がころがっていきそうな話が羨望とあきらめをもって語られていた。十五歳の吾平はじっとしておれなかった。

暖

八十トンの機帆船で、淡路島から大阪まで十時間かかった。急に船あしが落ちると、大阪湾から河幅を狭めた安治川をさかのぼった。河岸に叢が生いたち、へし曲げられたようなトタン塀に囲まれた貧弱な工場が点在していた。煙突の煙も白い春の陽ざしの中で、黒く寒々しかった。これが村の噂話に聞いた大阪かと、吾平は少年らしく何度も瞬きをした。間もなく富島の船着場へ着いた。見渡す限りの荒れ果てた根深畑の中で、人家が浜筋にそって石ころのように疎らだった。吾平は富島から千船橋まで歩き、そこではじめて人力車というものに乗った。船から上って食べたうどんが一杯五厘、千船橋から花園橋までの俵賃に二錢とられて驚いた。

村を出る時、聞いて来た淡路島出の者を世話する口入屋は、移転してしまっていた。長堀

橋の方らしいという曖昧な移転先を尋ねて二時間余りも歩き廻り、四つ橋のたもとで途方にくれて、坐り込んでしまった。人の足も、荷車も、吾平の前を早く通り過ぎてしまった。川岸に並ぶ材木置場から、木遣りが威勢よく河面にひびき、生々しい木の香が川べりの柳の枝をすりぬけて鼻をついた。濁った川の真ん中を、筏がゆっくり流れて行った。胴巻の中に残った三十二銭だけが、心細い頼りだった。

「どないしなはった」

通りすがりの年寄りが腰をかがめ、丸刈りの白髪頭を寄せて声をかけた。吾平はこれまでの気負いを他愛もなく失い、この年寄りにしがみつきたかった。

「大阪で奉公したい思うて淡路島から出て来よりましたけど、あてにしていた口入屋が見つからんと……」

涙声になってしまった。

「なんや淡路やて？ 淡路ならお前、わいとこの出性（先祖の出身地）と一緒にやがな」

「えっ、淡路のお人ですか」

吾平は意外な出遭いに、声をあげて泣き出した。嬉しかったのだ。

「ほんまに丁稚奉公するつもりで、大阪へ出て来たんか」

と年寄りは聞いた。

「なんぞ、ボロイことでもある思うて来たんと違うか」

「違います」

「そんなら、お前どないするつもりやったんや」

吾平は言葉に詰まった。どうすればよいか解らなかつた。

「どこでも働かせて下さい、お宅で置いて下さい、お願いします」

「まあ、待ちなはれ」

年寄りはそう云うと、吾平の顔をのぞき込んだ。その眼の光に思わず、吾平の足が竦んだ。
「まあええ、わいの家へ行つて話しよう」

何を思ったのか、年寄りは独りうなずいて歩き出した。四つ橋から続く広い川岸の道を、
吾平は年寄りに連れられて歩いて行つた。鉄色の着物を着て、茶色の皮袋をさげた年寄りは、
日和下駄の足もとを小幅に運んでいた。六十ぐらいの白髪頭の下で、一重瞼の大きな眼が、
こぼつと陥ち込むようにすわっている。吾平は、時々、その眼だけが鋭い年寄りの顔を、不
安げに盗み見した。

年寄りの足もとが止まった店先から、ツンと鼻をつく酸っぱい昆布の匂いがし、正面の屋
根に、古木に金文字で『浪花屋』と浮き出した大看板が、夕陽に映えて、吾平の眼先一杯に
広がった。

「旦那はん、お帰りやす」

打水に濡れた五間間口の奥から、一斉に声がかかった。紅殻塗りの店構えの奥に、厚司を

着た丁稚^{てうぢ}たちが十二、三人忙しくたち働き、小さくなって通り抜ける吾平へ、胡散臭^{うさんくさけ}な眼を浴びせかけた。店を通り越し、拭き込まれた小格子^{こごうし}のくぐり戸を二枚ぬけて中庭を出ると、そこは、太い梁^{はり}を組んだ天井の高い板敷の台所だった。だだっ広く薄暗い台所には、ランプが二つともついていた。竈^{かまど}の一斗釜^{いっとうがま}から白い湯気がたちのぼり、四、五人の女中が顔を赤くほてらせ、高下駄の齒をカン高くきしませて夕食の仕度をしている。ひつつめ髪で赤い襷^{たすき}をかけ、大きな箆^{ざる}一杯に沢庵^{たくあん}をきざんだり、井戸水をどんどん汲みあげて、足もとを水だらけにしていた。小ぶりに日本髪を結いあげて奥から出て来たのは上女中らしく、下働きの女中の差し出すお膳^{げん}を、ぞろりと受け取り、ものも云わず大障子の向うへ消えて行つた。

吾平は、台所の隅^{すみ}の冷たい上り框^{あががまち}に、小一時間、置き忘れられたように待たされた。

「旦那はんと若旦那はんが、茶の間へ呼んではります」

上女中の案内で、台所の次になる茶の間の長火鉢^{ながひばち}の前へ、吾平は請^{しょう}じ入れられた。年寄りのそばにひやりとするような白い顔だちをした旦那はんが坐^{すわ}っていた。

「お父はん、この子でっか、四つ橋で拾うて来はったのは」

いきなり可笑^{おか}しそうに笑い、吾平の身の上話から淡路島の釣^{つり}の話まで聞き出した。

「ふうん、十五か、齡^{とし}にしては小さい体やけど、二十日鼠^{はつかねずみ}みたい賢そうな眼してるわ、よう働きよるかいな」

ひやかされているようで、肝腎^{かんじん}の話は一向に出て来なかった。吾平は、一体、自分はどう

なるのかと不安になった。

「お願いいたします、このお店で使うて下さい」

まともに、年寄りの旦那はんの顔を頼った。居眠るように小首をかたむけて二人の話を聞いていた旦那はんは、その時しゃんと吾平の顔を見すえた。

「今日は御先祖の命日や、わいの故郷から、偶然、わいを頼る者が出てきたのも、何かの因縁やろ、しっかり働いて一人前になってみい」

この日から吾平は、五代目、浪花屋利兵衛に奉公し、お為着の厚司、前垂れ、木綿の兵児帯とともに本名の吾平を改め、『吾吉』という丁稚名が与えられた。

二

紺に白い盲縞の普通、丁稚縞と呼ばれる厚司の背中と、前垂れの真ん中には、大黒様に因んだ打出の小槌に『なにわ』と染めぬいた紋がついていた。

お為着を着た丁稚の吾吉の仕事は、来る日も、来る日も、ランプの火屋掃除と庭掃きばかりだった。火屋掃除は午前五時に起きて、十二個のランプの火屋を板の間に並べ、竹の先に綿をくるんだぼんぼんさんで、火屋の煤をふくのだった。この仕事はまどろかしかつたが、横目でこの店の商売の様子を見ているうちに、いつか吾吉の体の中にも商いのところが芽ばえて来た。火屋掃除も商いの一つだと思いついたのである。

ある日、厠かわやの帰りに縁側を通りかかった旦那だんなはんの足が、止まった。

「吾吉ごきちっとな、何時いつみてもえらい熱心やな、お前、ランプ掃除好きか」

吾吉は、暫しばらくうつ向いて黙っていたが、

「いえ、こんな辛気しんきくさいこと、一向性に合え致しません、けど……、酢のきいたピカッと光った昆布こんぶの艶つやは、煤けたランプの光でははえ致しませんので……」

あとは顔が赤くなって、口ごもった。

「なに？ えらいこと云いうてくれよる」

旦那はんの捨ぜりふのような言葉を聞いて、吾吉ははつとした。生意気なことを云ってしまったのではないかと心配した。それから四日目、吾吉は雑役から解放されて、はじめて店へ出された。奉公してから五カ月目だった。

しかし、店に出るとは名ばかり、店の奥で昆布を入れる袋はりと、旦那はんや、番頭はんの走り使いに追われた。『吾吉っとな』と声がかかると間髪ひまを容れず、『へーい』と答え、用事を云いつかるまでに腰を上げて爪先つまさきだち、聞き終るや、草履をつっかけて表へ飛び出す。その機敏なこつを呑み込むまでは、ノロマ！ ドンクサイ！ と口汚なく罵ののられた。

身丈みたけに余る前垂れに足をとられ、鼻の先に汗を一ぱいふき出し、焼けつくような盛夏の街を走りながら、吾吉は、今に見ておれ、えらい商売人になったと、声に出していた。淡路あわじ島の訛なまりをなおすのにも、そんなに暇をとらなかつた。間もなく大阪弁を粗忽そごつ無くしゃべれる

ようになり、お客の相手が許された。

黒とろろ百匁五銭、白とろろ七銭、おぼろ昆布九銭、出し昆布二銭――。吾吉の胸は躍つた。商人の卵やぞオと、咽喉の奥が鳴り、

「へい、毎度おおけに！」

張りあげる声は、向いの小間物屋にまでひびいた。

店番の合間には、支店や、別家衆へ注文の昆布を運ばされる。四つ橋や末吉橋のたもと、河岸の木陰で、通い櫃を積んだ荷車を止め、中から昆布の一つまみを手のひらにのせて、しんめり酢を吸うた昆布の肌合いを楽しんだ。舌の上にのせると、上品はとろりと溶けて甘すっぱい。ええ品物やなあと、卸し値、加工賃、売り値を反古で綴じた手帳に写し取って、口銭がいくらあるか勘定しては、商いの勉強をした。

若旦那はんは一人息子で、病身のせい、商売には一向、身を入れぬかわり、芸ごととは熱心で、素人浄瑠璃の名人番付は大てい二、三と下らなかつた。店は六十になった親旦那はんが、いつまでもきり廻し、奉公人にもじきじき厳しい躰をした。

「浪花屋の店先の古時計と、旦那はんの顔は何時みても違てへん」

近所の人たちは、親旦那はんのことをこう云った。

或る日、吾吉が蔵から昆布を運び出す時、ほんの一つまみほどの昆布が箱からこぼれた。はっと思ふ間もなく、うしろから大きな手が飛んだ。耳が裂けるような暗みの中でふりかえ

ると、旦那はんの眼が容赦なくたちふさがっていた。

「阿呆、何とぼけとおる、わいら何のおかげでごはん食べさして貰うてるのや、昆布のおか
げやゼエ、そない粗末なこととして大阪一の商人になれると思うてんのかア」

気をつけてみると、一日何十貫という昆布の出入りがあるにもかかわらず、店の床板に昆
布の屑が落ちていたことは少なかった。夜、店をしめてから掃除をする時は、旦那はんがじ
いっとたって見ている。昆布屑を掃き寄せるにしたがって、どうぞ、たと屑おまへんよう
に——と、床箒を持つ手がこわばった。はき寄せられた昆布屑は、一々丁寧に旦那はんの手
でより分けられ、出し昆布や山出し昆布の一片は、たとえ一かけらでも昆布を加工する仕事
場へ持って行き、とろろ昆布にかきなおしたり、油で揚げてほいろ昆布に加工して安売りし
た。縄屑や、ゴミは焚きものになるからと、土がまじらぬように掃き寄せねばならなかった。
大阪贅六が——と、ぬれ手に粟をつかむように、ポロ儲けすると思われていた大阪商人の
蓄財の道は、一にも二にも節約、節約だった。『金儲けも一つの修業や、節約、勤勉、努力
することや』と、吾吉なりに考えついたのだった。

三

その頃から吾吉の銭勘定はことのほか細かくなった。船場の商家の習いで、給金はなく、
小遣いとして月々貰う五銭はもちろん、二、三十銭の盆、正月の祝儀、祭のひねり紙さえ行

李の底へしまい込むことにした。時々盗られへんやろかとおつそり勘定してみるほかは、一錢も手をふれなかった。一日、十五日の休みにも『丁稚の楽しみ』といわれる千日前の犬と猿の物真似芝居も見なかった。一錢の入場料が惜しかったのだ。

奉公人たちは、店をしめてからも、すぐ寝床に入らず、夜更けの町へ出かけた。新町橋東詰めから井池筋へかけて、七の日に出る順慶町の夜店や、食べもの屋の沢山出る平野町の夜店まで足を延ばすのだと嘘をついては、橋一つ距てた向うの新町の廓へ遊びに行った。帰つて来ると、朋輩たちは蒲団の上で腹這い、豆板や、いか焼、ドラ焼を、ピチャピチャ、舌を鳴らして食べ、あげくのはて、頭から蒲団をかぶって聞えよがしに猥談した。

「吾吉っとんには出来へんこつちやなあ、吝嗇やさかい」

何がしぶちゃんや、今に見とれと、吾吉は齒をくいしばった。そんな時いつも吾吉は行李の底へしまい込んである貯金の額が眼先にちらついて、寝つかれなかった。

その年も暮に近づき、お煮爰用の『出し昆布』、お供え餅の上にかける『白いた昆布』、梅湯にそえる『むすび昆布』の売行きが多くなった。特に『白いた昆布』は極く上等の平昆布を芯の真白な地肌が見えるまで丹念にけずった品の良い、お餅とともに縁起を祝うもの。これが昆布屋の店先にたらりと並べば、師走の町も、ああ、お正月まで四、五日やと、急に氣ぜわしくなる。

日々の労働は、ますます激しくなった。朝五時に起き、店じまいが夜の十一時、お風呂を

戴^{いた}いて寢床に入るのが十二時、若い吾吉にも、これは辛^{つら}かった。手には、ざくろのようなあかぎれをつくってしまった。その手で固い帯のような出し昆布を三つに折って、五十匁^{もんめ}ずついで紐^{ひも}でくくる。パリッと昆布を折りたたむ度に、肉の割れ目が血をにじませて疼^{うず}いた。しで紐^{ひも}がしゅつと指先をしごいたとたん、体ごと火の氣のない板の間で飛び上った。

激しい指先の痛みで、吾吉は出し昆布のくぐりを続けることが出来なかった。奉公は辛いもんやと聞いていたが——と、吾吉は涙をにじませ、あわてて便所へ飛び込んだ。女便所でしやがんだまま、息を殺して泣いた。両手のあかぎれの甲に涙がひりひりとしみた。

「吾吉っとなん！ 何してなはんねん」

素頓^{すつとんきよう}狂な女中の大声に、吾吉は、はっとした。吾吉は便所の中で寝ていたのだった。誰^{だれ}が告げたのか、朋輩の笑い声のうしろから、

「吾吉！ ちよつと来い」

けわしい旦那^{だんな}はんの声が、つつ走った。台所の板の間の前にひき据^すえられたが、何のいいわけもなく、吾吉は恥^はずかしかった。

「裸になつて漆喰^{しつくい}に手ついてあやまりイ」

「へエ」

厚^{あつし}司を脱いで真裸になり、台所のたたきへ坐^{すわ}つて手をついた吾吉の頭の上から、いきなりバケツの水が二、三杯ぶっかけられた。全身が凍りついて、そのまま漆喰^{しつくい}に貼^はりついてしま